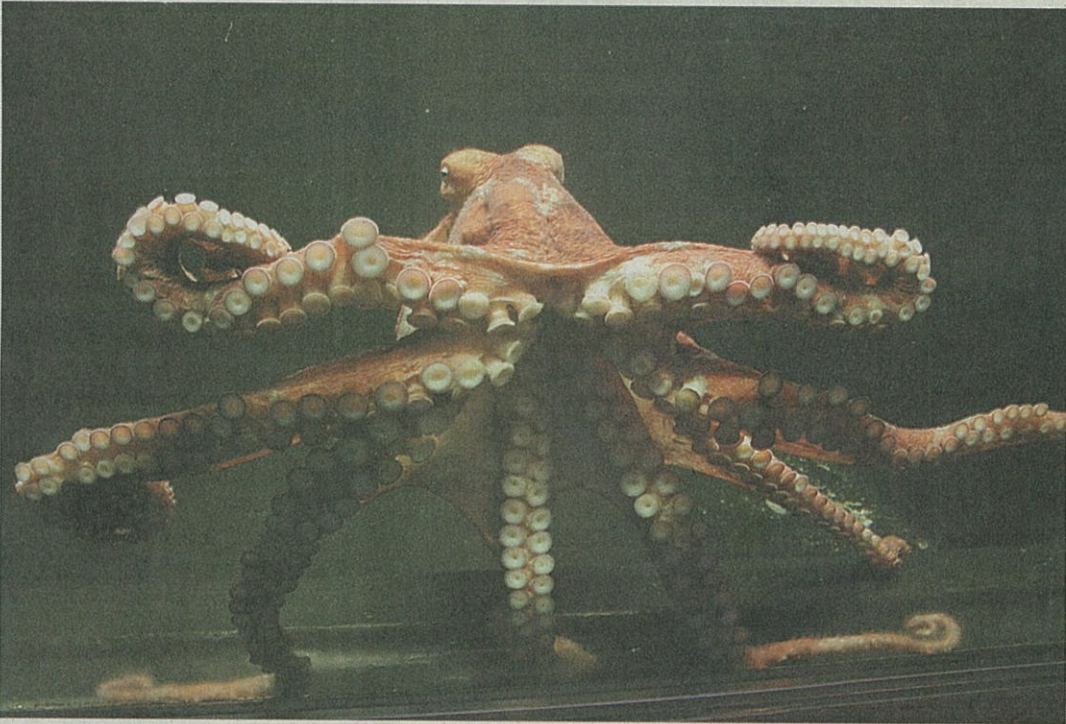
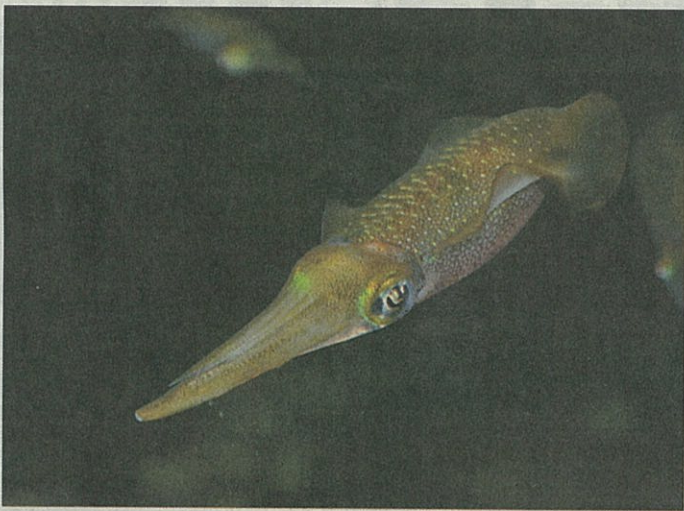




④ 毎年来に須磨の海で採取され、水族園の水槽で育っているアオリイカ⑤ 須磨海浜水族園の水槽で飼育されているミスダコ



軟体いろいろ

軟体動物という動物群がある。軟らかい体なのだから、クラゲやイソギンチャクなどもそうかと思うかもしれないが、彼らは違う。軟体動物に属するのは、貝やイカ・タコの仲間である。貝とタコは全然違うとおっしゃる方もお見えだろうが、彼らは外套膜という膜を持つことで一緒にされるのだ。貝の殻はこの外套膜で作るし、呼吸するのもこの外套膜を使っている。今、須磨海浜水族園のバックヤードの水槽には、愛媛県から運んできたアコヤガイがたくさん飼育されている。いつのぞいても、アコヤガイは動かない。ただよくよく見ると、貝殻の隙間を少し開けて、水を出し入れしている。水と一緒に酸素と餌のプランクトンを取り込んでいるのだ。アコヤガイなど二枚貝は寡黙だ。寡黙すぎて命を感じない。アサリにしるカキにしろ、貝殻の間にナイフを差し込んで、殻を開けようとする時、特にかわいそうとも思わない。

貝は寡黙でタコはインテリ

と聞くと、タコはインテリだという。日本ではタコと聞くとタコフツやすしである。明石タコは特にうまい。ところが欧米ではタコは賢い動物というイメージもあるらしい。水族園にはキキというギリシャ出身の研究員がいる。彼女の研究はまさにタコ。英国、オーストラリアで海洋生物を研究してきた彼女にとっては今のイイダコが珍しいらしく、それを飼育している。彼女に「タコは賢いのかい？」と聞くと、目を丸くして「当たり前だよ」と答える。何でわかるのか、と尋ねると、彼女は水槽の前に連れて行ってくれた。彼女のタコ水槽はいくつか並んでいて、1匹ずつイイダコが入っていた。彼女はタコに迷路を抜出す訓練をしているのだが、ごく普通に隣の水槽を指さし「あのタコ、こっち見てるでしょ。あれ、仲間がやってる訓練を見てるの」と平気で言うのである。いわゆるカンニングである。タコは他人、いや他タコの経験をも学習し、自分



④二枚貝の一種のアコヤガイ⑤アコヤガイの外套膜の中でできた真珠

の能力を発達させているのである。先日、すし屋でタコとイカとトリガイとサザエとちよっと高価なアワビを握ってもらい、考え込んでしまった。タコが賢いなら、イカもそこそこ賢そうである。しかし、申し訳ないがサザエやアワビに賢さは感じないし、ましてやトリガイにいたっては命さえあまり感じることはない。なぜこのように軟体動物の賢さに多様性が存在するのだろうか？ その秘密は彼らの生き方にある。魚を捕まえて食べるイカや、硬い貝をこじ開けて食べるタコは、餌を捕るためにさまざまな戦略を進化させ、賢くなる。逆に、海藻を食べるアワビやサザエは容易に餌が手に入る。トリガイは水を吸っているだけでいい。ちょっと失礼だが、賢くなくても生きていける。

神戸は真珠の町だ。真珠はこの寡黙なアコヤガイの殻の中で作られる。須磨水族園では2月10日、アコヤガイを解剖し、真珠を取り出してアクセサリーをつくら

り、さらにそのアコヤガイの貝柱を試食するイベントを催す。きれいな真珠を手にして喜んでいただき、さらに寡黙なアコヤガイに親しんで、彼らの命を感じてほしいのである。
イベントは10日午前10時、午後0時半、午後3時から3回。参加費2500円、同伴者1人までプラス500円。定員各20人。要事前申し込み(先着順、8日締め切り)。水族園(☎078・731・7301)。
|| 次回は3月7日



亀崎直樹 (かめざき・なおき) 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。